



ALM 手法のご紹介 第一回

日本ヒューレット・パッカード株式会社
HP ソフトウェア事業統括 小宮山晃

近年、様々なベンダーから Application Lifecycle Management(以下 ALM) 関連のツールが市場に出てきています。HP もそのベンダーの一社として ALM 手法を支援する製品を持っております。そこで今回 BTO Club の場を利用させていただき、ALM 手法に関する現在の状況と共に ALM 手法に基づいた HP 製品のご紹介と利用イメージを数回に渡ってご紹介させていただきたいと思っております。第一回は、ALM 手法の概念とそのメリットについて説明していきます。

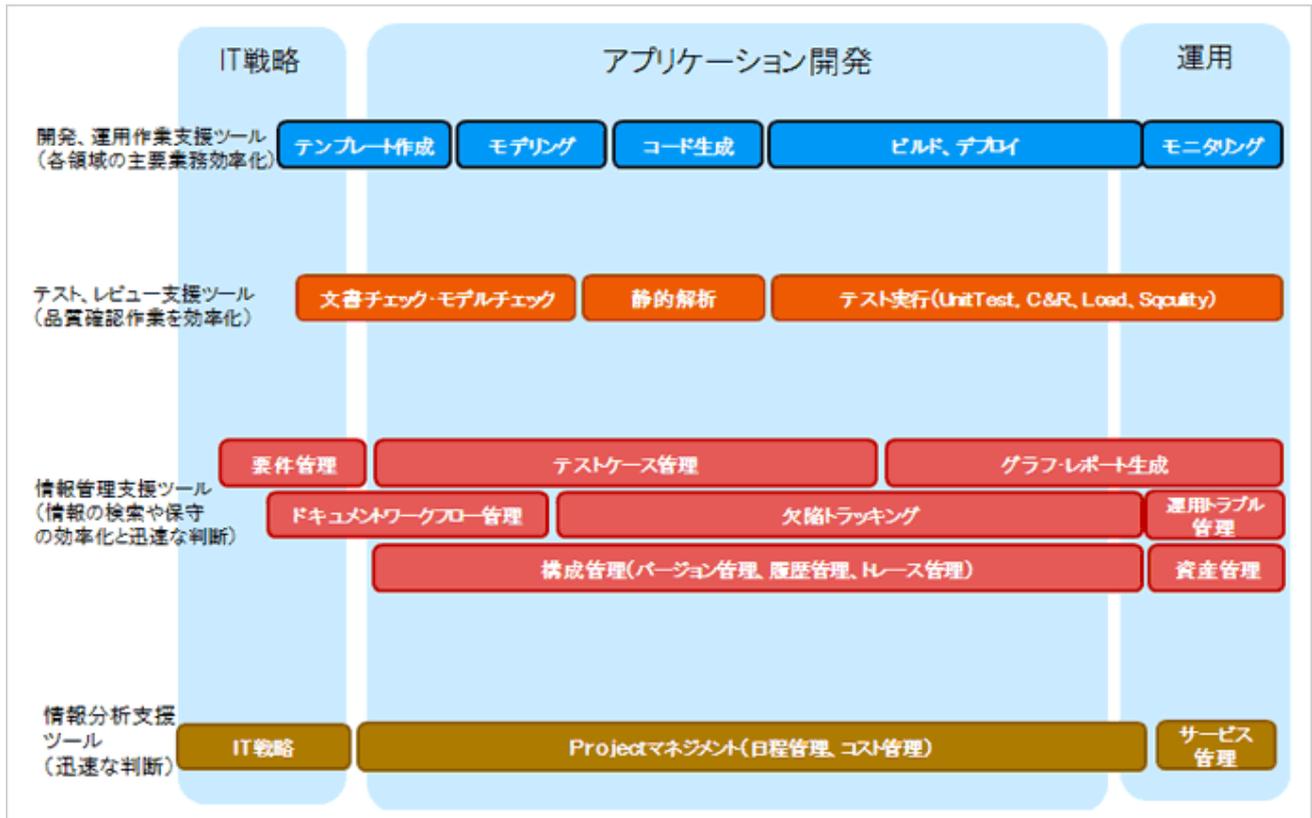
ALM に対するイメージ

そもそも、ALM と聞いて皆さんはどのようなイメージを想像されますか？これについては特に規定されているわけではなく、各ベンダーや ALM 手法を提唱している人によってとらえ方が変わっているのが現状です。ただ、そうはいっても、大きな意味での概念は同じであり、短く言えば、アプリケーションのライフサイクルである開発、運用保守の効率化という事です。

言うまでもありませんが、開発から運用保守はそのアプリケーションが廃棄されるまで、派生・保守開発による機能追加、バグ修正、バージョンアップ(特に ERP 系であれば法改正の度にバージョンアップやパッチ適応が必要)が行われるため開発プロセスの手法と運用保守の手法はつねにライフサイクルとして繰り返されていきます。

ここまで来て、「そんなことは十分わかっているし、それらを効率化するためのツールも導入している」と思われる方も多いかと思っております。ざっと大まかに区切るだけでも次のようなツールのカテゴリが存在しています。そして現場では何かしらの有償、無償に関わらず効率化のためにツールを利用しているはずで

1. モデリング 2. コード生成 3. 静的解析 4. テスト実行 5. 欠陥管理 6. 運用管理 7. 構成管理 8. 運用トラブル管理 など



ALM とは横断的な連携による「全体最適化」

ならば、ALM とは具体的に何を効率化するものなのでしょうか。答えはそれほど難しいものではなく、ALM を提唱している各ベンダーの見解をできるだけ包括して言うと、ALM とは各ツールによる効率化を「部分最適化」と呼ぶならば、こういった様々なアプリケーションライフサイクルに関連したツールを横断的に連携させて「全体最適化」を実現していく手法だと考えられます。ALM を提唱している各ベンダーはこれを実現するためのソリューションを提供しているのです。

これによって、アプリケーションに携わるステークホルダは全体を通して今、アプリケーションはどのような開発状況なのか、運用で問題が発生したアプリケーションはそもそもどの程度の品質を満たしていたものなのか、プロジェクトに全体のリソースのどのくらいを消費しているのか、といった各ツールだけでは得られない横断的に意味を持った情報を得る事ができるのです。

HP では、そもそも、全体最適化が求められる背景としてアプリケーションの近代化に伴い、より複雑化したシステムの可視化、ベストプラクティスを利用することによる生産性の向上、システム全体を通じたコスト削減が求められている事があると考えています。

特にこの 10 年をみても、以前のサイロ化されたシステム単位での管理ではなく、それぞれのシステムの持っている情報や価値をクロスファンクショナルに利用することが IT 戦略として求められてきていますが、それに伴い、それぞれのシステムのバージョンアップ時期が異なる事や管理ツールも独自であるため、可視化を難しくしているのではないのでしょうか。

ではここでもう少し、ALM の特徴である横断的に情報が得られる事のメリットについて代表的なところをとりあげてみたいと思います。

- ・ **生産性の向上**

プロジェクト単位、サイロ化された以前のシステム管理手法から全体を一元化することでベストプラクティスの共有を行うことで生産性の向上を実現します。

- ・ **継続的な品質向上**

要件管理とテスト結果の照合、運用中の不具合と関連するテスト結果の照合を行うことで常に開発チーム、品質保証部 以外のメンバーも加わって継続的な品質向上への貢献を可能にします。

- ・ **ツール間のスムーズな連携**

ツールごとの垣根を超えた横断的で有益な情報を得る事が可能になります。同じ情報であっても現在は手動で各ツール 間からデータを移行したり、加工したりして行っていることが簡素化できるようになります。

いかがでしょうか、ALM 手法の概念とそれがもたらすメリットについて理解をもっていただけたのではないのでしょうか。

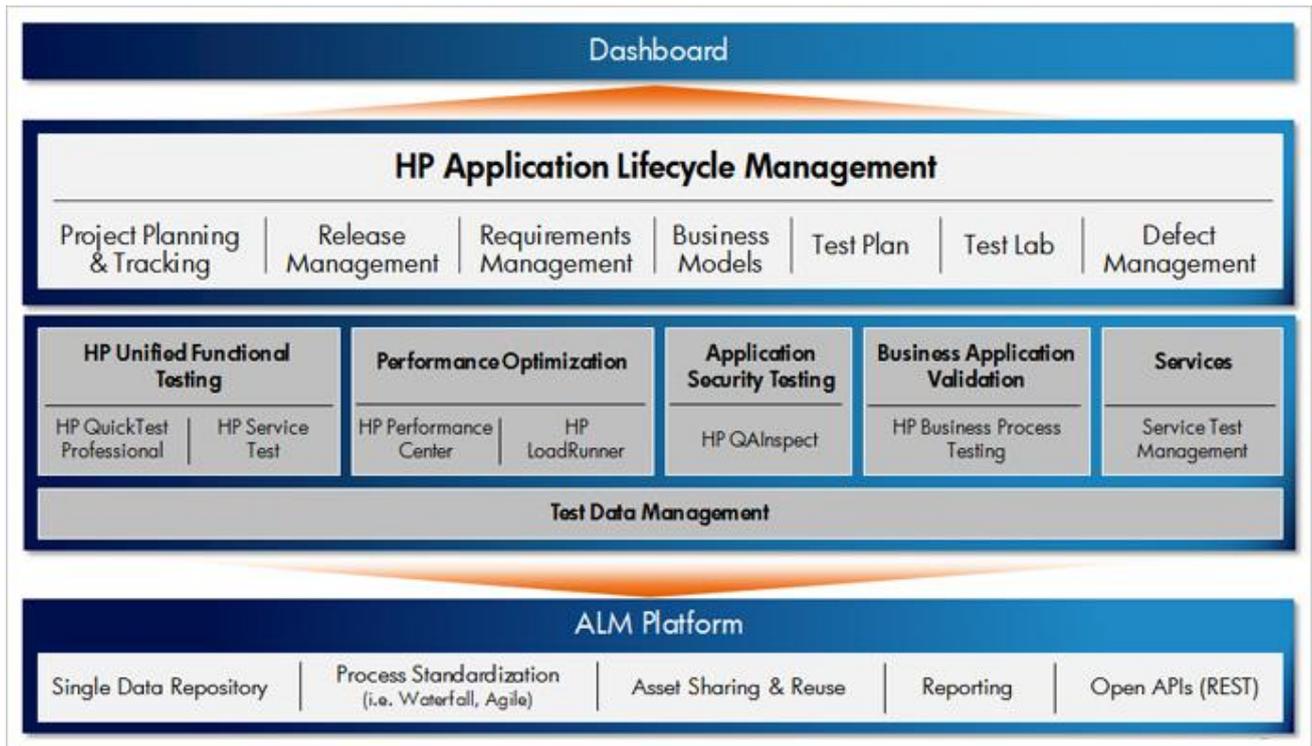
ALM を支援するツールに求められること

次に ALM 手法を支援するツールに求められるものはどういった事なのか考えてみたいと思います。横断的に情報を得るためには各ツールが同じベンダーから販売されているものであればたしかにベンダー独自に連携を図ることができるかと思いますが、実際の現場では、有償、無償に関わらず様々なツールを導入しているのが現状ではないでしょうか。つまり ALM 支援ツールの選定ポイントとしては、**どのような既存利用ツールと連携ができるのか**というのが大きな評価項目になるでしょう。

- ・ **ALM ツールの選定ポイント**

ALM ベンダー製のツールだけではなく他のツールとの連携がどこまで実現可能なのか

HP では、下の図 2 にある構成で ALM に関係する製品をそろえております(各製品情報は[こちら](#)をご覧ください)。製品間の連携が行えるのも特徴で ALM に必要なツール間の連携を実現します。特に次期 Quality Center のメジャーバージョンアップでは、現在の Quality Center Premier に ALM ツールに必要な機能を充実させて、新たに Application Lifecycle Management という製品名でリリースされる予定です。



まとめ

まとめますと、アプリケーションのライフサイクルを通した全体最適化として ALM という手法があることをご紹介しました。これにより、ツールごとの垣根を超えた横断的で有益な情報を得る事が可能になります。そして、垣根を越えるためにはライフサイクルを通して利用されるツールを連携させて効率化していく事が必要になります。そのため、ツール間の連携がどのようなものなのか、同じベンダーではないツールの場合はどうなのか、といったところも ALM 支援ツール導入の際の評価項目になります。

次回以降では、HP 社の ALM 製品のご紹介と、製品間の連携、他ツールとの連携例も紹介していく予定です。